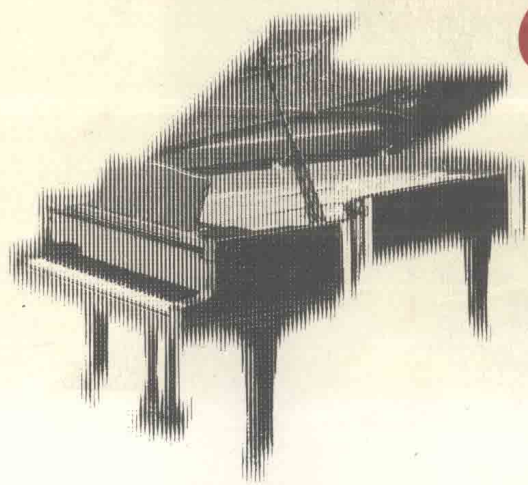


ハネケン
羽田健太郎の

ピアノ初めて

物語

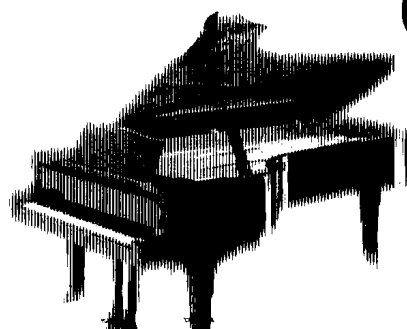


—海を渡った♪幻のメロディ♪ロマン紀行—

羽田健太郎

中央公論社

ハネケン
羽田健太郎の
ピアノ初めて
物語



海を渡った♪幻のメロディ♪ロマン紀行―

羽田健太郎

JASRAC 出9810182-801

ハネケン はじめのものがたり
羽田健太郎のピアノ初めて物語

うみ わた まぼろし きこう
海を渡った♪ 幻のメロディ♪ ロマン紀行

1998年10月10日 初版印刷

1998年10月20日 初版発行

著者 はねだけんたろう
羽田健太郎

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-4-34

印刷 三晃印刷

製本 小泉製本

©OFFICE TWO ONE INC./SHIZUOKA ASAHI TV

1998 Chuokoron-Sha, Inc.

Printed in Japan ISBN4-12-002842-9 C0073

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

序奏

5

第一楽章 「浜松、長崎、萩ピアノ三都物語」

10

第二楽章 「オランダ序曲」

51

第三楽章 「ドイツ協奏曲」

84

第四楽章 「イタリア交響曲」

156

フィナーレ

172

装丁
馬場崎仁

羽田健太郎のピアノ初めて物語

海を渡った♪幻のメロディ♪ロマン紀行

序奏

月曜日の午前七時過ぎ、東京駅の構内はまだラッシュのピーク前。それでも、一週間の始まり。休み明けて、まだ体も気持ちも本調子でないサラリーマンやOLたちが、黙々と構内を歩いている。そんな雑踏を避けて、私は駅構内のレストランで、一人ハヤシライスを口に運んでいた。朝っぱらからハヤシライス……結構ヘビーな朝食、とお思いかもしれないが、これがなかなか乙な味なのである。サラリーマンの皆さん、朝から食べるハヤシライス、ぜひお試しあれ。

さて、私がなぜ朝の七時から東京駅でハヤシライスを食べているのか？　というと、実は今日から一週間、テレビ番組のロケで東京を離れるのだ。静岡朝日放送開局二〇周年記念番組で、番組の案内役をこの私が務めることになったのである。

静岡といういろいろな日本一がある県だ。まず、富士山。私も以前「ニュースステーション」のピアノ中継で、富士山の頂上でピアノを弾いたことがある。あの時の大変さは、まちがいにピアノ中継の歴史に残ることだろう。私が富士山の頂上でピアノを弾き、バイオリニストの佐藤陽子さんが伊豆の海岸でバイオリンを弾いて生放送でデュエットするという企画で、富士山の頂上へわざわざピアノを運び上げたスタッフの苦労には、頭が下がる。と同時に、三七七六メートルの標高差でみごとにデュエットを成功させるテレビの技術もたいしたものである。いずれ地球と月でデュエットできる日も、そう遠くないかもしれない。

しかし、アンサンブルする相手が近くにいないというのは、想像以上にやりにくいものである。バイオリンとピアノ、歌とピアノなど、音楽の場合二人以上はアンサンブルと呼ぶわけだが、通常は同じステージで相手の息づかいを感じながら演奏する。相手が近くにいるこそ、相手の息づかいを感じて曲の出だしを合わせたり、フレーズの表情を合わせたることができるのだ。それが三七〇〇メートルも離れて、モニターテレビとそこから聞こえる音声だけを頼りにアンサンブルするというのは、かゆいところに手が届かない状態で、本当は実に具合が悪いのである。たとえば言うなら、カラオケのデュエットを電話で歌うよう

なものである。やはりアンサンブルは、お互い生身で向き合い目と目を見つめて、寄り添うように演奏しなければその醍醐味を発揮できないのである。

富士山については、昔から「富士山に登らない馬鹿、二度登る馬鹿」という言葉があるが、まさにそういう感じである。我々は九合目の山小屋にスタンバイした。昼間、スタッフたちはそれぞれの準備に忙しいのだが、出演する私は何もすることがない。昼間から酒を飲むこともできないので、登山客の様子を眺めたり、山の天候の変化を眺めるだけ。刻々と移り変わる山の天気はそれなりに興味深いが、それだけ見ているのはやはり退屈である。麻雀セットでも持ってくればよかったと思ったが、スタッフは全員忙しく働いているので相手がいない。まさかマネージャーと二人でやることもできないし、昼間の退屈さには参った。

そして夜、番組が終わってから大変だった。深夜に高山病になって救助を求めてくる人がいたかと思うと、番組の打ち上げでさんざん飲んで寝た直後に、いきなり拡声器で「御来光を拝む時間ですよ」と起こされた。時計を見ると午前二時である。午前四時頃出る御来光を拝むためには、その頃起きなくてはならないらしい。しかし我々はいきさつき寝たばかりである。わざわざ拡声器で言わなくてもいいと思うのだが。

というわけで、大変な体験であった。私は、もう一度富士山へ登ろうと言われたら、多分断るだろう。「富士山に登らない馬鹿、二度登る馬鹿」名言である。

さらに、静岡は日本一のサッカー王国でもある。他にお茶の生産、かまぼこの生産も日本一とか。しかし、今回の番組のテーマは、サッカーでもお茶でもかまぼこでもなく、やはり静岡が生産日本一を誇るビアノである。そこで、この私に白羽の矢が立ったのだ。

まあ、番組の内容は、これからおいおいお話しするとして、その番組のロケで静岡へ向かうために東京駅で私の事務所のマネージャーと待ち合わせしている間にハヤシライスを食べていたというわけである。

コンサート以外で地方に行くことはめったにない私は、まるで遠足に行く小学生のように妙にワクワクしていた。さらに国内のロケが終わると、オランダ、ドイツ、イタリアのロケも控えている。これがウキウキしないでいられるだろうか？ 普段は年に一五〇回ほど日本各地でコンサートをしている私が、国内ロケ一週間と海外ロケ二週間の間、コンサートから解放されるからだ（もちろん、番組ロケの中でビアノを弾くシーンは何回があるが……）。

これからの旅が、どんな旅になるのか？ どんなハプニングが待っているのか？ そんな

序奏

な期待に胸をふくらませながら、ハヤシライスで腹もふくらんだ頃、マネージャーが現れた。さあ、旅の始まりである。

第一樂章 「浜松、長崎、萩ピアノ三都物語」

我が家に初めてピアノが来た日

私の家に初めてピアノが来た日のことは、今でも鮮やかに覚えている。これは小学校二年生の時、母が私のために買ってくれたピアノ。嚴重に梱包されたピアノが我が家に運び込まれて、いよいよ梱包が解かれた時の匂いは、今も忘れられない。その匂いをたとえると、ちょうど初めてホットケーキを食べた時の、上にかかっているメイプルシロップの匂いに似ている。それまで嗅いだことのない何とも言えず洋風な匂い。当時の私には、ピアノは限りなく洋風なものだったのだ。

それ以来、妻よりも長く人生の大半と一緒に過ごしてきたピアノ。しかし、私はそのピアノがいつどのように日本に入ってきたか、そのプロセスをまったく知らなかった。そこで今回、番組を通じてそれを探訪しようと強い興味を引かれたのである。

浜松市楽器博物館

午前七時四五分、東京発ひかり一五三号に乗り込んだ時、東京上空は今にも雨が降り出しそうな雲行きになっていた。そして横浜を過ぎた頃、とうとう雨が降り出してきた。

テレビのロケでは、天気は重要なポイントだ。天気次第で、映像の雰囲気もまるで違ってくるからだ。それに雨が降ると、カメラや機材を雨から守るためにスタッフは倍の苦労を強いられるのだ。それで、ロケで雨が降ったりすると、「この中に雨男がいるんじゃないの？」などという言葉が飛び交う。そしてなぜか、本当に雨男、雨女がいたりするから不思議だ。

それにしても、新幹線は便利である。特に私たちのように仕事で日本中を旅するものにとっては、なおさらである。新幹線ができる前は、大阪を日帰りできるなどとは誰が想像

しただろう。というのも、通常コンサートは一八時三〇分か一九時開演が普通である。私の場合ソロのコンサートであれ、他の誰かとの共演であれ約二時間がコンサートにかかる時間である。そうすると、終演がなんだかんだで二一時となる。一九時開演の場合は大阪近郊では間に合わないが名古屋圏だとちょうど良い時間となり、東京に、つまり自宅に帰れるのである。これが非常に助かる。そんなわけで今では、最終の「のぞみ」には毎月必ずお世話になっている。それも、一度や二度ではない。しょっちゅうである。その最終「のぞみ」こそ私の東京への最後の手段。最終便なのである。そんな新幹線がなかったら、私の仕事もかなり効率悪く、もしかすると少なくなってしまうだろう。

しかし、いいことばかりではない。新幹線に乗っていると、かなりストレスの溜まる出来事に遭遇することが少なくないのだ。その一つが携帯電話。最近のマナーもずいぶん普及して、以前より少なくなったが、今もたまに大声で携帯電話をかけている人と同じ車両になることがある。本人は相手と話しているから気にならないかもしれないが、周りでそれを聞く我々は、本人の声しか聞こえないから何を話しているのか気になってしかたないのだ。気にしたくもないものが気になってしかたのない状況は、かなりストレスが溜まる。それにあの呼び出し音。最近では、音楽を呼び出し音にできる機種もあるらしく、突然『ド

ラえもん』のテーマや『太陽にほえろ』のテーマが高らかに鳴り響くと、怒りを通り越してただただ情けない気分になってしまう。

最近コンサートホールで無神経に鳴り響く携帯電話の音は、少なくなった。もうそろそろ、新幹線や電車の中で携帯電話を控えるマナーも定着してもらいたいものである。

そんなことを考えているうちに、浜松駅に到着。雨はますます激しく降っている。駅でスタッフと合流した私は、思わず言ってしまった。

「この中に雨男がいるんじゃないの？」

スタッフは一樣に自分が雨男ではないと主張。そんな会話が初対面のスタッフたちとの距離を縮めてくれるのだ。別に、誰が雨男かなんて本気で究明しようと思っっているわけではない。これもある種、この業界の挨拶のようなものなのかもしれない。

結局誰が雨男か判明しないまま、私たちは最初のロケ地へと移動した。そうそう、ここですでに紹介しておかなくてはならない女性がいる。今回私と一緒に国内を旅してくれるパートナー、純名里沙さんである。宝塚歌劇団の出身で、NHKの朝のテレビ小説『ぴあの』などで一躍お茶の間の人気者となった女優さんと言えはわかりだろう。最近では、トレンディドラマでも大活躍。今回ピアノをテーマにした番組にはびつたりの、ピアノが似

合う女優さんである。親子ほども年の違うお嬢さんだが、とても明るくてかわいい方という印象を受け、これからの旅がますます楽しみになった。

最初に訪れたのは、浜松駅前アクトシティのすぐ裏にある浜松市楽器博物館。博物館には研修交流センターという施設も併設されていて、若いサラリーマン風の青年たちが、大勢そこへ入っていく。建物は非常に近代的で、エントランスには洒落たオブジェの木が置いてあり、とても明るい雰囲気だ。その奥に、世界中から集められた貴重な楽器の数々が陳列してある。

私は、ヤマハやカワイというピアノメーカーがある浜松の博物館だから、ピアノやハープスコード、チェンバロ、オルガンなど鍵盤楽器ばかりかと思っていたが、そこには木管楽器、金管楽器、弦楽器とあらゆる種類の楽器があった。オーボエ、オーボエ・ダ・モーレ、フレンチホルン、ビオラ・ダ・モーレなど、お宝鑑定団に鑑定してもらったら、いったいどのくらいの値打ちがあるんだろう、などといふ考えてしまうほど貴重な楽器がたくさんある。私のように音楽好きの人間にとっては、一日中いても飽きないところである。

骨董品としての希少価値もあるが、私はこの楽器をどんな人がどんな場所でどんな曲を弾いていたのかと想像するのが楽しい。中世のお城の広間で、貴族やお姫さまたちが弾い